国際ワークショップ「ディコロナイゼーションと他者」

【趣旨】

近年、アメリカで生まれたＢＬＭ（黒人の命も大切だ）運動と連動して、西欧諸国とりわけ英米では、近代における帝国主義的植民地政策やそれと連続していた奴隷制による負の遺産に対する是正を求める声が高まりつつある。大英博物館の常設展における植民地政策に関する説明の拡充や所蔵されている「資料」を本来の所有者・国への返還を求める気運の増大はこの流れに入る。同時に、一般社会、そしてより直接に帝国主義の影響を受けて成長を遂げてきた歴史を持つ大学等アカデミアの世界では、学問や現行社会の諸制度に潜む負の遺産を取り除き、社会、または大学、あるいは個人の思考そのものをいかに「脱植民地化」（decolonize）できるのかをめぐる議論が交わされている。大英博物館のすぐ隣に位置し、「東洋アフリカ研究学院」という名を持つロンドン大学 SOAS がその主要な現場の一つとなっていることは必然であると言えるかもしれない。

日本も近代において大日本帝国として朝鮮半島、台湾、満州国をはじめ、新たに獲得した国外領土において植民地政策を実行した。そして、英米の社会と同様、そうした政策による負の遺産は現代日本社会においても、戦後における経済成長や技術的先進国としての成功譚に影を落とし、未だ解消されていない多くの課題を残している。その一方、英米の社会やアカデミアに見られる「脱植民地化」の気運は日本で同じように勢いづいているとは言い難い。

脱植民地化（decolonization）の英米社会での近年の気運の高まりは、近代の中の植民地政策が現在の英米社会の構築において果たした役割の大きさを反映していると言えるだろう。ところが、「ディコロナイゼーション」という理念ないし運動は、果たしてどこまで個別の二者による支配・被支配関係を超え、広く世界中に共通する「グローバルな」ものになりうるのだろうか。また、「ディコロナイゼーション」をそのように構想した場合、個別の力の闘争における加害と被害の固有性、とりわけ負の遺産の「負」を負わされてきた「他者」たちの固有性を汲み取る責務はいかに果たせればよいのだろうか。

以上の問題意識に基づき、本ワークショップではロンドン大学 SOAS にて日本のメディア表象における戦争の記憶に関する研究に携わってきたグリゼルディス・キルシュ氏を招聘し、脱植民地化――あるいは「ディコロナイゼーション」――という理念ないし運動と他者性との関係をめぐり議論を交わし、理解と考察を深めていきたい。

文責：トーマス・ブルック（神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程）

【当日のスケジュール】

2022 年 3 月 24 日（木）

第一部

17:00-17:05 導入（トーマス・ブルック）

17:05-17:50 ・メンバーによる研究発表

トーマス・ブルック（神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程、芸術学）「“colonialism”の固有性について――水村美苗『私小説 from left to right』と英訳 *An I-Novel* を題材として」

奥堀 亜紀子（PD、神戸大学、哲学）「「祖国」にまつわる感情を探る――金時鐘の「クレメンタインの歌」を出発点にして」

17:50-18:10 質疑応答とディスカッション

--休憩--

第二部

18:20-19:10 特別講演

増本 浩子（神戸大学大学院人文学研究科教授）「スイスの精神的国土防衛と文学におけるアルプスの表象――デュレンマットの『チベットの冬戦争』を中心に」

Griseldis Kirsch（ロンドン大学 SOAS 准教授）“Imagining alternative pasts: Imperial nostalgia on Japanese television”

19:10-19:40 ディスカッション・総括

【主催】

神戸大学大学院人文学研究科・他者をめぐる人文学研究会

【参加方法等】

Zoom によるオンライン開催

ミーティングリンク等の詳細は参加予定者に事前にメールで通知する

申し込み先：suitashitom@gmail.com（トーマス・ブルック）

【使用言語】

日本語、英語